

山形県連小会報

第169号

発行日 令和6年5月31日

発行者 山形県連合小学校長会

樋口潤一

山形市木の実町12-37

県教育会館(大手門パルス)

県連小 第1回理事会報告

智慧と力を合わせ、挑戦し続ける県連小

樋口潤一会長あいさつ



令和6年度の会長に指名いただきました、山形市立第四小学校の樋口潤一です。県連小会員の一人として職責を自覚し、各地区校長会のご協力をいただきながら精一杯務めてまいりますのでどうぞよろしくお願いたします。

令和元年度末から4年にわたったコロナ禍を乗り越え、昨年の7月6日と7日に第63回東北連合小学校長会研究協議会を本県にて開催いたしました。研究協議会の副主題に「人間力に満ちあふれ、社会や地域の持続的発展に貢献できる子どもを育てる学校経営の推進」を掲げ、校長の学びの場という目的を明確にしつつ、働き方のマネジメントを視野に入れた運営面のスリム化も図りました。「東北はひとつ」という東北連小の理念を要に、実行委員会を中心に準備を進め、各県の校長同士が学び合える山形らしい大会を実施することができました。ご臨席いただいた全連小会長と事務局長からも「東北の団結力と学びに向かう勢いを感じた」という感想をいただき、さらに嬉しく思ったところであります。ご尽力いただいた皆様に、改めて深く感謝申し上げます。

今年度は、令和元年度以来5年ぶりに、山形市のヒルズサンピアを会場として、飽海地区が主管となる山形県連合小学校長会研究協議会を開催する予定であります。飽海地区校長会の皆様方におかれましては、すでに綿密な計画とご準備を力強く進めてくださっており、慶應義塾大学名誉教授の富田勝先生による「AI時代の人間の価値と教育」をテーマとするご講演を含め、県内の校長が一堂に会して学び合う価値を再認識できる機会となることを確信し、協働して成功へとつなげていきたいと考えます。

昨年6月に、国の第4期教育振興基本計画が閣議決定され、県においても、今年度中に第7次教育振興計画（7教振）が策定される見通しです。こうした計画のキーワードとなっているのが日本社会に根差したウェルビーイング（生きがいや人生の意義などの将来にわたる持続的な幸福を含む概念）の向上であります。7教振策定に向けた検討では、ウェルビーイングの向上を目指す上で重要となるのは、「挑戦」であるという議論も重ねられています。私たち校長も、国や県の動向も注視しつつ、未来に向けた学校の在り方を広く深く見直し、柔軟かつ果敢に挑戦を続けていきたいと考えています。

山形県連合小学校長会は、県内11地区に組織されている校長会の連合体として存在しております。それぞれの地区校長会における伝統や文化、考え方などがありますが、その違いをむしろ強みとして智慧を出し合い、新たにお迎えした46名の会員とともに221名の力を合わせていくことが、各学校経営の充実と組織の目的である本県教育の振興につながっていくものと考えます。

昨年度から教員の定年が段階的に引き上げられ、また本県教育委員会が全国に先駆けて実施した新採教員育成・支援事業が注目され、国全体での取組に広がるなど、教育環境が日々刻々と大きく変化していく今、校長が明確な教育理念をもち、現状と課題を明確に捉えた判断のもと、未来を見通す学校運営を行っていくことが求められます。県連小会員の智慧と力を合わせて、子どもの幸せを願う挑戦を続けながら、それぞれの小学校が魅力ある教育活動を実践できますよう祈念して挨拶いたします。



県連小旗引継

新副会長あいさつ



子ども達の明るい未来のために

吉田 健志

今年度、上山地区理事、そして村山地区代表として県連小副会長を拝命しました。どうぞよろしくお願ひいたします。

私は、これまで6年間校長としてコロナ前・中・後の子ども達を見続けてきました。コロナ渦によって学校現場はこれまで経験したことのない大きな混乱に見舞われ、その中で変化してきた子ども達の様子がとても気にかかります。不登校やいじめ、荒れ、無気力などが、コロナ対応による副反応のように年々深刻化しているように感じます。そのような中、ようやく様々な規制から解放された学校が戻ってきました。この令和6年度は、このような子ども達が前向きにそして健やかに成長するために私たちはどんな学校づくりをすべきか、また、様々な教育課題を解決するために何をすべきか、腰を据えて考えなければならない大事な1年と捉えています。

ピンチはチャンスでもあります。私たち一人一人がもっている「目指す子ども像や学校像」を語り合い、子ども達の未来の姿を共に描き、新たな学校経営の土台をつくるチャンスにしていきたいと思ひます。そういう点で、各地区小学校長会・県連合小学校長会は大きな役割を担うものです。子ども達の明るい未来のために、子どもたちに夢と希望を与えられる学校となるよう共に学んでいきたいと思ひます。どうぞよろしくお願ひいたします。



笑顔あふれる学校に

須藤 明

この度、東置賜地区理事として、県連小副会長を拝命しました。どうぞ、よろしくお願ひいたします。

先日、1年生が「学校って、こんなに楽しいと思わなかった。」と話してくれました。この言葉を聞いたとき、私自身、衝撃を受けるほどうれしくなりました。隣で聞いていた担任も同じ思いだったでしょう。そして、近くにいた子どもたちも「学校って本当に楽しいね。」と続きました。このとき、こういった思いを子どもたちが持ち、

その笑顔を教職員で共有できる学校にしていきたいと強く感じました。

これまで校長という立場で、学校全体、町全体を見て取り組んできたことは間違いありません。しかし、こういった子どもの思いまで通じていたのか、管理・監督面に軸足が移りすぎていなかったか、改めて考えさせられました。そして、今一度「子どもたちの笑顔のために」ということを第一に考え、さらに、この笑顔が職員の意欲や原動力につながるよう校長がリーダーシップを発揮しなければならない。そのためにも、地区校長会や県連小の学びの場を最大限に生かし、校長間で情報や学びを共有し、課題を解決していき、子どもたちの笑顔、喜びに満ちた学校づくりに邁進していきたいと考えています。微力ながら、本会のため、ひいては子どもたちの笑顔のために力を尽くして参りたいと思ひます。



共に、さらに一歩前へ！

小澤 敏一

今年度、田川地区理事、そして、庄内地区の代表として県連小副会長を務めることになりました。

さて、昨年度は、新型コロナウイルス感染症の5類移行に伴い、様々な事業がほぼ元通りに行われるようになりました。東北連小山形大会も山形市校長会の皆様のご尽力で盛大に開催され、「東北は一つ」を実感できた大会となりました。私は10月に4年ぶりにフルスペックで開催された全連小東京大会にも参加させていただきました。事業報告がほとんど全部見え消しだった地区の校長会の研修会も計画通り行われ、地区内、県内はもとより東北や全国の校長先生方と意見を交わし研修できたことは大いに刺激となりました。やはり、モニター越しではなく顔と顔を合わせ、実際に言葉を交わし、互いの熱い思いに触れることの大切さを改めて感じたのは私だけでは無かったと思ひます。単純にコロナ禍前に戻せば良いと言うわけではありませんが、様々な課題が山積する教育界で、顔を合わせなければならないのはどれか、時間をかけなければならないところはどこなのかを見極めながら事業を進めていかなければならないと感じています。県連小のさらなる発展のために精一杯務めてまいりたいと思ひます。“共に、さらに一歩前へ”よろしくお願ひいたします。

県教育委員会のご指導

◎県教育局義務教育課

高橋典子 課長



「義務教育課所管事項等について」

1 概要

- (1) 学校数 314校(前年比-1校)
- (2) 児童生徒数 約70,900人
(前年比約-2,000人)

2 説明・報告〈令和6年度主要事業等について〉

- (1) 教育山形「さんさん」プランを基盤とした確かな学力育成強化策

- ・教育山形「さんさん」プラン
- ・「教科担任マイスター制度」の概要(全体)
- ・全県学力向上オンラインミーティング全4回開催。
- ・各学校において下記資料等の有効な活用を。

※各教科等の指導の重点

(二次元コードやURLによる動画や資料)

※児童生徒向けリーフレット

※架け橋カリキュラム

- (2) チーム学校生徒支援体制整備事業

- ・学習指導員の配置
(新規 小学校で25校)
- ・「心の健康観察」導入推進事業



◎県教育局教職員課

沖野久康 課長



「教職員課重点施策」

重点施策1 学校における

「働き方改革」の推進

- (1) PDCAサイクルの構築
- (2) 管理職や教職員の更なる意識改革及び保護者等の理解促進
- (3) ICTの有効活用
- (4) 人材の確保及び外部人材の活用
- (5) 業務の外部委託の推進
- (6) 教育課程全体の見直し
- (7) 部活動改革の推進

重点施策2 適性のある優れた教員の確保

(優秀な人材の確保)

- (1) 教育を取り巻く環境の変化に対応できる優秀な人材の確保
- (2) 若手教員の育成(若手教員育成ハンドブックの活用)
- (3) 多様化する課題に対応できる学校経営能力に優れた管理職の登用
- (4) 女性管理職の積極的な登用、ミドルリーダーの育成

重点施策3 「信頼される学校づくり」の推進

- (1) 服務規律の徹底
- (2) 教職員のメンタルヘルス及びストレス管理に配慮した学校運営への支援

令和6年度 山形県連合小学校長会役員一覧

	役名	理 事	対 策 委 員	生徒指導委員	研 修 委 員
会長 樋口 潤一(山形四)	地区	山 形	佐藤 昌彦(山形三)	原田 健男(山形七)	細川 直弥(蔵王一)
		上 山	吉田 健志(上山南)	遠藤 克裕(宮 川)	塚原 洋樹(上 山)
副会長 佐藤 昌彦(山形三)		東村山	鈴木 義彦(山 辺)	大場 壮一(蔵 増)	大津 範夫(豊 田)
		西村山	那須 隆秀(寒河江中部)	建部 敦(左 沢)	安孫子孝司(北谷地)
吉田 健志(上山南)		北村山	笹原 良子(東 根)	富樫 和浩(大久保)	伊藤 礼輔(東 郷)
		最 上	浅井 純(日 新)	浅沼 幸治(真室北郡)	柿崎 聖(鮭 川)
浅井 純(日 新)		米 沢	金子 明夫(西 部)	小池 直人(松 川)	佐藤 珠水(六 郷)
		東置賜	須藤 明(亀 岡)	田中 靖士(吉 島)	平 千秋(屋 代)
須藤 明(亀 岡)		西置賜	丸川 和久(荒 砥)	星野 一浩(伊佐沢)	金田佐智子(蚕 桑)
		田 川	小澤 敏一(朝暘一)	伊藤 健治(藤 島)	村山 能弘(立 川)
今 将史(東根中部)		鮑 海	阿彦 淳(若 浜)	是谷あゆみ(浜 中)	石黒 久(一 條)
	担任理事			鈴木 義彦(山 辺)	那須 隆秀(寒河江中部)
監事 佐藤美和子(寺 津)	幹 事	幹事長	大沼 清司(山形二)	佐藤 浩子(山形九)	佐藤 勝子(楯 山)
		会計	森谷 弘昭(明 治)	高橋 和久(あはりの丘)	森谷 弘昭(明 治)
宮部 卓(溝 延)		事務局長	櫻井 順一		
					横山 聡(山形南)
					太田 千春(山形五)

理事研修会議より

テーマ

『生徒指導～不登校対応に係る取組について』

【情報交換の視点】

これまでの不登校対策を見直す機会に資するよう「誰一人取り残されない学びの保障に向けた取組」や「多様な学びの場を提供する取組」について情報交換し、研修の場とする。

【各地区の現状や課題】（一部抜粋して掲載）

（上山）

要因として保護者とあるが、学校体制や担任の要因も感じられる。不登校児童対象に令和7年度から「学びの多様化学校」を開設する。小中合わせて20名。学校としても連携を図っていきたい。支援員による働きかけや特別支援学級児童との関係づくりによる友達関係がつくられており、人的配置の影響は大きい。

（東村山）

コロナ禍をへて、原因がはっきりしないまま長期化する事例が多くなっている。学校につれてくることが一義的な目標ではなく、就労も視野に入れて、どこに着地点を見出すか、保護者の願いも受けながらチームで考えていくことが大切である。不登校、不適切な対応について、『生徒指導提要』をきちんと読み込んで対応していくことを重点としている市町村もある。

（西村山）

要因は、「不安感」「多様化」がキーワードだと感じた。「多様化」について学校が対応しきれないということはないだろうか。多様な児童がいて、不安感をもっている児童が多い。学校のスタンダードが厳しすぎないか、と感じている。多様化している児童に合わせていくということ、一人一人に合った学びの場所をつくっていくことを検討していく。

（北村山）

若い担任が増えているので、保護者との対応について、組織チーム体制をつくっていくことを大切にしている。事例に基づいて対応を検討することが職員の学びになる。また、子どもの自己決定・自己選択を大切にした学校体制を整えていきたい。自分の学びを自分でつくるという授業改善など、教職員がアップデートしていくことが不登校対策につながる。

（最上）

「なんとなく学校に行くことができない」というのは家庭の要因が多いと考える。子ども一人一人に寄り添うという感覚を、学校で本気になって取り組む必要がある。不登校の未然防止に取り組む機能を持たせた場所を学校の中に設けることも考えている。ボランティアの方から協力を得て、共感的に言葉がけした時に教室復帰した事例もある。

（米沢）

小中連携の中でも1番の課題として取り組んでいる。日常的にケース会議を開いているが、時間はかかる。「子どもを育てる」という視点に、「対応の循環」から「育成の循環」へ、変換していきたい。鍵となるのは担任力の向上ではないかと考えている。校長として担任がチャレンジできる環境を整えていきたい。

（西置賜）

未然防止と早期対応に軸足を置いて取り組んでいる。チームでの対応は当然、担任力アップが土台と考える。日課表を変更して担任力を高めるための研修を確保した。中学年の時期をどう乗り越えていくかが大切。また、親の生育歴が子育てに影響するので、親への支援をPTAやコミュニティスクールとして取り組む必要を感じている。

（田川）

アンケートをもとに、夏休みに校内体制づくりについての研修を行った。不登校の要因が複雑であることで対応が難しくなっている。未然防止として、授業改善、担任の人間性が大切であり、若手の育成に努めていきたい。週時程を変更し、放課後に授業づくりの時間や、昼休みを5分長くして子どもと担任が触れ合う時間を確保した。

（飽海）

不安を持つ家庭も多く、保護者がやっていることに価値付けをして不安感をなくすことに努めた。失敗に対する恐怖感を感じている子に不登校が多い。不安を緩和するものを求めている。教職員はクラスづくりでどこに焦点を合わせるか、それがどの子どもに合うのか繊細に感じながら進めていかなければいけない難しい時代になっている。

（会長より）

学校の中に安心して過ごす場所をつくることを実践してきた。子どもが「僕の気持ちを分かろうとしてくれる人がここにいるよ」と感じる場所に学校がなればよい。これが安心・安全な学校風土の醸成、「発達支持的生徒指導」になる。

